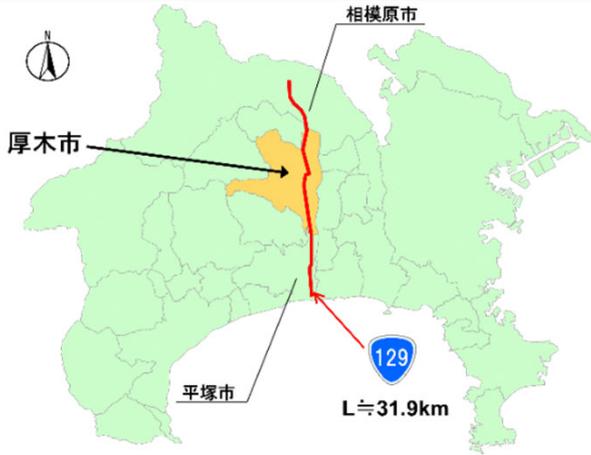


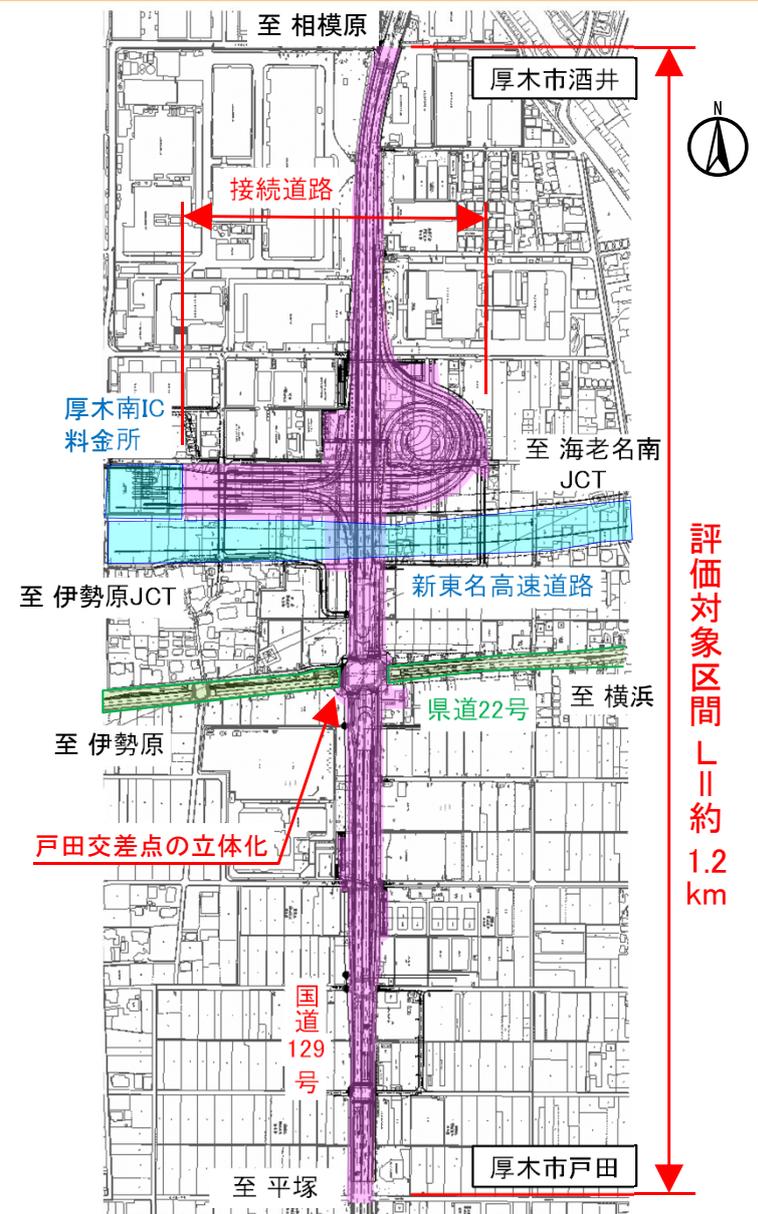
1 プロジェクトの内容と目的

- 本路線は、平塚市高浜台の国道134号を起点とし、相模原市緑区の国道16号に至る、延長約31.9kmの県が管理している国道であり、新東名高速道路「厚木南IC」、東名高速道路「厚木IC」及び圏央道「圏央厚木IC」に接続する路線である。
- 事業区間は、国道129号の厚木市戸田から、厚木市酒井までの延長約1.2kmの区間であり、戸田交差点は、交通量(平成27年道路交通センサス)が約3.9万台/日の本路線と約3.0万台/日の県道22号(横浜伊勢原)が平面交差しており、交通渋滞が慢性化していたことから、交差点の立体化が必要であった。
- また、新東名高速道路「厚木南IC」への接続道路であることから、開通に合わせた整備が必要であった。

神奈川県域図



平面図



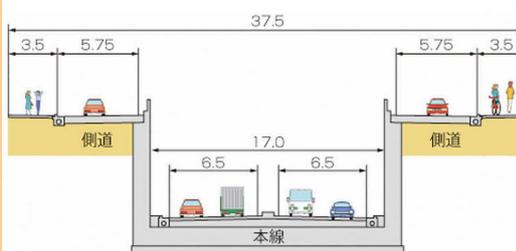
厚木市域図



プロジェクトの内容

- 計画交通量: 39,500～43,200台/日 (R12年推計)
- 道路規格: 第4種第1級
- 設計速度: 60km/h
- 幅員: 22.0m～37.5m
- 主な工種: 交差点立体化工事
厚木南IC接続道路整備工事

標準横断面図



整備状況



2 プロジェクトの効果

総合的な効果

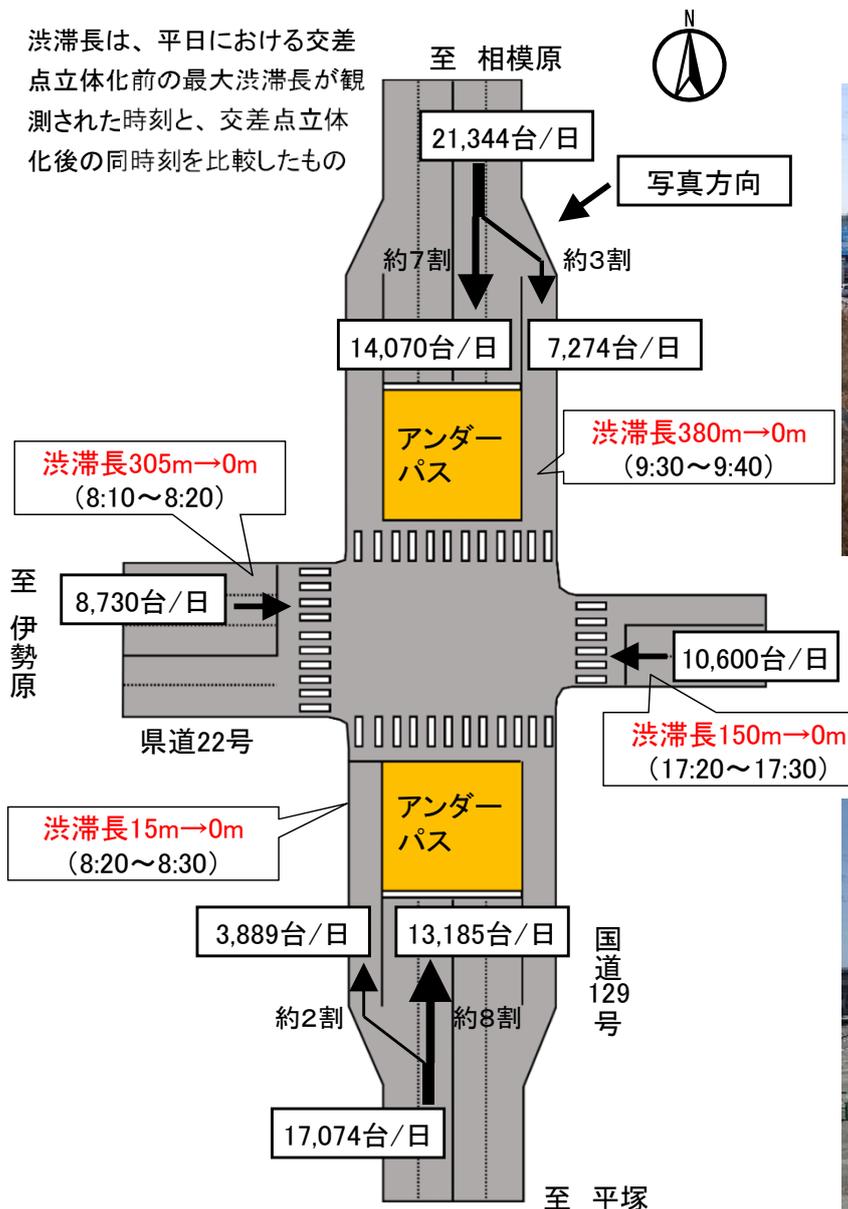
- 第一次緊急輸送路である本路線の整備によって、地震等大規模災害時の救助活動や輸送道路の機能強化を図ることができた。
- 災害時の救援活動の拠点で、県所有最大の災害用備蓄倉庫を備えた「神奈川県総合防災センター」が直近に立地しており、災害時に本路線を活用することによってアクセス性が向上した。
- 交通渋滞の緩和により交通利便性が向上した。
- 評価対象区間の北側では、令和元年に南部産業拠点(酒井地区)約27.6haが市街化区域に編入され、土地区画整理事業(工業系)が行われている。また、国道129号沿道には、物流施設、商業施設等の立地が進んでいる。

効果の発現状況

- 交差点の立体化前(H29. 1月)に、最大渋滞長が観測された時刻における交差点を先頭とする渋滞は大幅に緩和した。
- 国道129号を走行する車両の約7~8割が、立体交差化されたアンダーパスを利用し、約2~3割が側道を利用している。

● 渋滞長・交通量調査結果

渋滞長は、平日における交差点立体化前の最大渋滞長が観測された時刻と、交差点立体化後の同時刻を比較したもの



● 国道129号戸田交差点北側の交通状況(相模原→平塚方面)



交差点立体化前調査日:平成29年1月17日(火)
交差点立体化後調査日:令和 4年5月26日(木)

関係する地方公共団体等の意見

- 厚木市 : 評価対象区間は、本市の南の玄関口となる地域であり、交通渋滞の緩和及び厚木南IC開通による交通利便性の向上を実感しています。
- 厚木消防署 : 国道129号については渋滞も減り、現着時間は短縮したと感じている。
- バス事業者 : 路線・高速バスともに渋滞が緩和されたことにより、5分から10分程度時間短縮され、ゆとりある運行が可能となった。

プロジェクトの投資効果の分析

- 本プロジェクトの建設費や維持管理等の費用(C(Cost))に対する投資効果としては、渋滞解消による①走行時間短縮効果、②走行経費減少効果、③交通事故減少効果を地域が受益している便益(B (Benefit))であると想定されるため、この費用便益比(B/C)の関係を投資効果として分析した。

この結果、本プロジェクトのB/Cは1.5となった。

- プロジェクトの投資効果の分析

$$\begin{aligned} \text{費用便益比 (B/C)} &= \frac{\text{供用後50年間の時間短縮・走行経費減少・事故減少便益}}{\text{建設費} + \text{供用後50年間の維持管理費}} \\ &= \frac{548\text{億円}}{374\text{億円}} = 1.5 \end{aligned}$$

$$\text{経済的内部収益率 (EIRR)} = 5.7\%$$

※ 建設～耐用期間の総費用、総便益については、物価の変動や利率などによる社会的な貨幣価値の年変動を、社会的割引率4%として考慮(現在価値化)し、算定している。

3 プロジェクト実施にあたっての特記事項

- 本事業は、新東名高速道路の建設現場と重なるため、県、中日本高速道路株式会社、両者の受注業者で構成する「戸田地区工事協議会」を設置した。概ね月に1回、協議会を開催し、次のような相互調整や連携を図りながら事業を進めた。
 - ・ 施工ヤード、工事の順序、交通量が多い供用中の道路から建設現場への資材搬出入
 - ・ 県工事の接続道路を工事用進入路として活用し、新東名高速道路の工事を実施
 - ・ 建設工事に伴う騒音、粉塵、土砂搬出入等に対する地域住民からの声を共有し対応
- 立体化工事中も、国道129号の4車線を常時確保するため、覆工板を設置して地上部を車道とすることで、道路利用者への影響を最小限にした。

4 プロジェクトによって得られたレッスン

- 中日本高速道路株式会社も含めた「戸田地区工事協議会」を開催し、施工ヤードや工事の順序等の相互調整、騒音・粉塵等に対する地域住民からの声を共有し、連携して対応することで、建設現場での安全を確保し、地域住民や通行者の理解を得ながら事業を進めたことは、今後の類似事業のレッスンになると考える。

5 考察

- 本事業は、交差点の立体化により交通渋滞が緩和し、厚木南IC接続道路の整備により広域的な道路ネットワークの確立等の目的を達成することができた。